

たことがないので、国語がどういう内容のものかあまり想像がつかなくて、果たして何か手伝えるのか不安だったが、一緒に国語を担当していた他の学生に何をすればよいのか相談して、何とか宿題を進めることが出来た。彼女は古文というものを学校で習っていて、漢字の読み方が分からなく苦戦していたので、分からない漢字の読み方を教えてサポートした。

最後は中学生の男の子の勉強をみることとなったが、その子は自分と同じブラジル人で、勉強は母語で説明してほしいということで、私が担当を任された。彼も古文を習っていて、練

習問題のところで「何か分からないところはあ  
る？」とポルトガル語で聞けば、「問題文の意味  
が理解できない」と彼は答えたので、私はその  
問題の文を読み、その意味をポルトガル語で説  
明した。

日本の学校に通ったことがない私にとって、日本の学校の教科書は興味深かった。また、日本語が分かっている、それをうまく使って子どもたちに説明できなかったのが悔しかった。自分が出来ることの少なさに虚しい気持ちになった。この経験を生かして、次回機会があればやりかたを工夫してみようと思う。

## 初めてのボランティア活動



国際学部 国際文化学科 4年

土田 美幸

私は去年の11月から今年の2月まで学生ボランティアとして県南の中学校で外国人児童生徒に日本語支援を行っています。今までボランティアをしたことない私がこの活動に参加したのは、私自身も日本語が話せない時期があって同じようなボランティアの方に大変お世話になったからです。この話が来たときは「今度は自分が恩返しをする番かな」と思いました。

今回は去年の5月にフィリピンから来た中学3年の女の子に支援をしています。支援内容は日本語のサポートだけでなく、メールやSNS等を通して私生活や精神面でのサポートもできる限り行なっています。支援をしている女の子は日本で長年働いている母親と一緒に暮らしたいと思って日本に来たそうです。母親思いなうえ、努力家でとても明るく、チャーミングな子です。高校受験まで数ヶ月しかないという状況でも、彼女の頑張る姿には私も励まされています。中学校へは週に1回通い、最初の1ヶ月半はテキストを使って学校や日常で役に立つ日本語を中心に勉強をし、残りの期間で高校受験の面接対

策のサポートをしています。初めてのボランティアということもあって、最初はどのような方法で支援をするべきか戸惑いましたが、彼女と毎日積極的にコミュニケーションをとって、彼女にとって何が一番役に立つかを一緒に考えながら支援をしています。最近では彼女の日本語のインプット力がとても高まり、日本語で指示などをしても理解してもらえるようにまできまりました。これからはアウトプットの練習もたくさんしていこうと思っています。

この支援を通して私自身、いろんなことを学ばせていただいております。支援を始める前は自分も経験したことだから日本語を習っている人たちにとって何が大変かを大体把握しているつもりでしたが、支援している子に会うたびに新しい発見をしています。特に漢字を教えるのはとても大変です。小学一年で習う漢字でも音読みと訓読みを合わせて法則もなく読み方が多才な字に直面するたびに私も彼女もため息をします。また、会話の練習をしている時に日本語特有の空気を読んでその場の状況やそ

の語彙の真の意味を把握することを教えるのもとても難しく感じます。この活動を通して改めて私に日本語を教えてくださいました人の偉大さを

感じるとともに、自分自身ももっと日本語を教えられるような人になりたいと思うようになりました。

## Yくんの母語を生かした学習支援について



大学院国際学研究科 2年

耿 蘭 竺

Yくんの母語を生かした学習支援を始めたのは昨年5月からです。12月まで約7か月間に週に1回、Yくんがいる県内の小学校に行って学習支援を行いました。学習支援の対象となるYくんは現在小学校5年生で、今回の学習支援が始まった時は日本語の日常会話には特に問題はないが、教科学習が難しいという状況でした。特に、書くことに大きな抵抗がありました。一般に、日本語指導が必要な子どもに対しての支援は日本語で行うのが多いと思います。しかし言語形成期にいる子どもにとっては、持っている母語力を維持あるいは伸ばさない、日本語がまだ十分に習得していないうちに、母語を忘れてしまい、思考言語を喪失する状況に陥る可能性が高いです。なので、今回の学習支援はYくんの母語、中国語を活用しながら、教科学習についていけるようになることを主な目的にしました。以下、各時期の支援実態を紹介します。

1学期目のより高い日本語力が必要とされる社会と国語は取り出しで、他の教科は入り込みで学習支援を行いました。始まったばかりの時、学習支援がうまくいかなかった時が多かったです。一番難しいと感じたのは、授業中に先生が言っている内容に対してはどこがわからないのか、なぜわからないのかなどの把握です。言語の問題なのか、学力の問題なのか、それとも両方なのか。その判断にとっても時間がかかりました。

1学期目が終わったところ、Yくんは取り出し学習支援に少し慣れてきた様子が見えました。夏休みの1ヶ月間を利用して、宿題をもとにし

て1学期目のポイントの教科内容をテレビ電話で学習支援を続けました。週に2回、毎回1時間くらいをかけて、Yくんが理解することが難しい内容に対しては母語で説明した上で、わかるようになったら、対応する日本語を教えるというやり方を取っていました。またわかる内容をYくんに自分の言葉で説明させることを通して、内容を十分に理解できているかどうかの判断もできます。Y君本人も自分で説明できるようになったことにとっても嬉しい様子が見えました。

2学期目に入って、Yくんは母語での学習支援のほか、日本語指導も受けるようになりました。内容は主に日本語基礎です。母語で教科学習を中心にして支援を行いました。1対1で細かく説明や確認ができると考えるので、算数と理科も取り出し支援でやることになりました。Yくんは1学期目と比べ、勉強意欲が高くなり、書くことに対する抵抗も減ってきたように見えました。

母語を活用した学習支援において課題はまだたくさんありますが、今回7ヶ月間の学習支援を通して母語の力を借りて、子どもの教科内容の理解にプラスの影響があることがわかりました。しかし外国人散在地域での母語保持・伸長は簡単なことではないので、母語支援者、学校、保護者との連携体制の構築の重要性を感じました。またこれから日本語習得や教科学習においては母語の役割や活用の必要性が広く認識されるべきではないかと考えます。